

誰かにとつての「鹿の王」に

三木東中学校 三年 馬越ひかり

「鹿の王」この本のタイトルに対して、あなたはどのような印象を抱きましたか。本屋さんで初めてこの本を手にしたとき、私の中に浮かび上がってきたイメージは群れをなす鹿たちを束ね、統率する勇敢な存在でした。しかし、この本を読み終えたとき、そのイメージは完全に覆されました。

世界を侵食する謎の病。過酷な運命に抗いながらも旅を続ける戦士と一人の少女。病の謎を解き明かすために奔走する医師たち。様々な問題にぶつかりながらも壮大な謎に挑む人々の絆を描いた物語です。医療を主眼に置いたストーリーでありながら、民族の争い、医療哲学、宗教観・死生観の違いなどのテーマについてさまざまな視点から考え、学ぶことができました。

今までは病について、また「生きる」ということについて深く考えることはありませんでした。しかし、私たちはこの二年間、連日テレビやネットで報道されている新型コロナウイルスによって、病について否応なしに考えざるを得なくなりました。そんなコロナ禍だからこそ、この感染症をテーマにした物語がより強く胸に響きました。この物語でホッサルやミラルが病の謎を解き明かすため、懸命に治療法を探す姿が、今この瞬間にも最前線でコロナに立ち向かってくださっ

ている医療従事者の方々へと重なって見えました。そして改めて、医療従事者の方々の努力や苦難を知り、感謝する気持ちを忘れてはならないと強く思いました。

さらに、この本を読んでもう一つ学んだことがあります。それは「物事の善悪や価値観を一つに断定してはいけない」ということです。この物語の世界では、オタワル医術と清心教医術という二つの異なった思想の医学が対立しています。「目の前に助けられる命があるのなら、どんなに難しくても決して諦めない」という考え方のオタワル医術と、「治療をして下手に延命するよりも心安らかに天命を全うすべきだ」という考え方の清心教医術。生と死に対する考え方が根本から異なっていました。私は最初、病から一人でも多くの命を救うべく奮闘する主人公ホッサルの姿を見て、オタワル医術のほうが正しいのではないか。はなから諦めてしまっているような清心教医術は間違っている、と決めつけていました。しかし、物語の中で一人の男が病によって亡くなり、その家族を清心教医師が「神はみておられます。どうかよく生きてください」と慰める場面がありました。このとき、著者である上橋さんがオタワル医術に傾倒している私たち読者に対して「本当にそれが正しいの？」と問いかけてくるようでした。そんな問いかけは私たちの生活においても非常に大切なことだと思えます。また、異なる二つの物事を片方は善でもう片方は悪だとはっきり断定してしまうのではなく、

多様な視点からそれぞれの事柄について考え、自分の中の価値観を広げられるようになりたいと思いました。

そして最後に「鹿の王」というタイトルについて。「鹿の王」とは、始め考えていたような「群れを支配する者」という意味ではなく「本当の意味で群れの存続を支え、尊ぶべきもの」つまり、大切なもののために己の命をかけて戦う者のことだったのです。最後に主人公ヴァンがとった行動は、そんな「鹿の王」と同じだったのかもしれませんが、かつては全てを失い、絶望のあまり死を望んでいた男が、たくさんの人々との出会いを通して生きる意味を知り、最後には皆を守るために闘う。そんな、誰かのために己の犠牲をいとわない人がいるのならば、その人に寄り添い、手を差し伸べる人もたくさんいるはずです。「ときに、他者に手を差し伸べ、そして、また自分も他者の温かい手で救われて、命の糸を紡いでいくのだ」という作中の言葉にもあるように、民族や国の垣根を越えて人と人が手を差し伸べあえることができるならば、きっとどんなに暗く長いトンネルでも前を向いて進んでいけると思いました。

この物語を通して、医療の役割や死生観などさまざまな問題を多様な視点から見ること、自分の考えを深めることができました。そして、ヴァンやホッサルがそうであったように、いつか私も誰かにとっての「鹿の王」のような存在になれるといいなと思いました。